

「共生」という言葉すら意識しない 自然な共生社会を育んでいきたい



小松賢吉

さん(62歳)

横浜市スポーツ推進委員連絡協議会副会長
港北区スポーツ推進連絡協議会会長

これほどまでに取材に協力的な方は、後にも先にも出てこないと思えるほど、用意周到に取材に臨んでくださった小松会長。インタビューシートの文字数は1万字にも上り、私たちが知りたい障がいのある方の「本音」、や「共生社会」、って具体的にどんな社会なのか、ご自身の言葉で語り尽くしてくださいました。

指摘されるまで、健常者の フリを続けていた

——小松さんは、幼い頃から聴覚に障がいがあったのですか？

小松さん たぶん生まれつき難聴だったと思うんですけど、子どもの頃は、僕が聞こえにくいことを周囲の人はわかってくれていたので、障がいを気にすることはなかったですね。それどころか、授業中、先生の声が聞こえにくいことをいいことに、隣の席の女の子に話しかけてはしょっちゅう先生に叱られるような子どもでした(笑)。

——ご自身は耳が不自由だということをはなかなか受け入れることができなかったそうですね。

小松さん 小学校もそうですが、中学・高校時代も学校の配慮で何不自由なく過ごすことができ

ました。とはいえ、成長するにつれ、聴力が衰え、大学での講義はほとんど聞き取ることができなくなっていました。当時は教師になるという夢がありました。

なので、板書と教材で勉強し、教員採用試験を3回(年)受けましたが、面接官の質問をほとんど聞きとれなくて、就職への道を諦め、一般企業に就職しました。この頃はまだ、自身の状況を受け入れることができず、聞こえないことを知られたくない、隠したいという思いがあり、勤務先で健常者を装っていたら、「小松君、僕の話、伝わっていないでしょ」と指摘されたことで、危機感を抱き、24歳で障害者手帳を取得しました。そして、横浜市の身体障害者採用試験を受けたところ、幸い合格することができ、横浜市役所に入庁(転職)することができました。

——先程から手話を使わなくても小松さんは私の話を通じていられるようす。なぜですか？

小松さん 相手の口の形を見て



小松賢吉さん

横浜市在住。1959年、東京生まれ。幼少期から難聴。現在は聴覚障害2級（最も重い等級）。玉川大学を卒業後、電機メーカーのプログラマーを経て障がい者枠で横浜市役所に入庁。同交通局で経営計画やシステム開発などを担当。2020年に定年退職。1999年、横浜市体育指導委員。2017年、横浜市港北区スポーツ推進委員連絡協議会会長に就任。2021年、横浜市スポーツ推進委員連絡協議会副会長に就任。学生時代はサッカー、バレーボール、柔道。社会人になってから水泳をはじめ、現在は自転車とカヤックで日本全国を駆け巡る。趣味は写真。2児の父

いるのと、話しの流れから相手が言おうとしていることを予測しているからだと思います。それでも、急に話題が変わるとついていけなくなることがあります。今、コロナで皆さんマスクをされているでしょう。こんな風にアクリル版があればいいのですが、このご時世・状況では「マスク外していただけたらいいか？」とは言いがたいところがありますし、どうしたらいいの

か：思わぬ形で「コロナの影響」を感じています。
——ほかに不便を感じる点は？
小松さん 会議全般です。対面はマスク着用ですし、オンラインは声が聞こえないので、議論することができません。とはいえ、資料や画面共有である程度のはかばかできていいると思えます。昔はコミュニケーションツールといえば電話しかなくて、このまま仕事を続けていけるかどうか不安な時期もありましたが、今はメールやSNSなど連絡手段が増えたので、不自由を感じるものが少なくなりました。ありがたいことですし、オンライン会議での問題もチャット機能を活用すれば解決できるかもしれません。また、新た



積極的に外出するきっかけとなった福祉特別乗車券

なコミュニケーションツールの開発やテクノロジーの進化にも期待しています。
——スポーツを行う上で、支障を感じることはありますか？
小松さん 本人が危険を察知できないことだと思います。「後ろ危ないよ」とか「止まれ」と注意されても聞こえないから、ケガをすることもしばしば…。実は、自転車に興味で全国を走っているのですが、息子と一緒に走っていたとき、トラックに煽られていることに全く気付かず走っていたら、猛スピードで私のすぐ側をトラックが追い抜いていったんです。後ろを走っていた息子に「親父、ヤバかった。命拾いました」と言われました。僕自身はアクティブでありたいと思っていますが、自分自身で感じていないところで知らず知らずのうちに「リスク」を抱えていることもあるんだ…ということを知って、これまで家族や友人にどれほど心配をかけたの

だろうと思うと申し訳ないですし、いたたまれない気持ちになることもあります。
地域住民の眼差しが子どもたちの安全を守っている
——スポーツ推進委員になったきっかけを教えてください。
小松さん 36歳の年、平成7（1995）年1月に「阪神淡路大震災」が、3月に「地下鉄サリン事件」が発生しました。この二つの出来事から、ご近所や地域の助け合いが「命を繋いでいる」ところや、親の目の届かないところで子どもたちの安全を守ることができるのは、地域の住



横浜市港北区スポーツ推進委員委嘱式（2021年度）

地元スポーツ大会での表彰式の一コマ



民だと思うようになりました。妻はママ友やPTAを通じて、ご近所と付き合いがありました。が、私は地域のことを何も知らず、体育指導委員（現スポーツ推進委員）のこともそのとき初めて妻に教えてもらいました。それから少しずつ、地域の行事に顔を出すようになり、2年後（1997年）、38歳のとき、自治会から推薦するので「体育指導委員を引き受けてほしい」と



横浜アリーナでのイベントでボッチャ普及活動に協力



合間を縫って記録写真を撮影

お願いされ、見習いのつもりでお引き受けしました。最初は地域の人とお付き合いができれば…という程度の軽い気持ちでしたので、まさか20年以上続けることになるとは思ってもみませんでした。

公務員と地域住民 両方の立場で後方支援する

——スポーツ推進委員のやりがいと抱負を聞かせてください。

小松さん スポーツ推進委員は地域内のさまざまな団体、スポーツチームなどの想いを集めて、問題の改善や意見をとりまとめたり、事業を後押しすることができます。また、スポーツ推進だけでなく、地域住民の健康増進、安心・安全に暮らせるまちづくりに向けて、より後方支援的な役割

を担っていく必要を感じています。スポーツを推進することは、人と人の出会いを創造すること”に通じていると信じています。住民の皆さんが顔見知りになれば、それだけで安心できま

すし、子どもたちを非行や犯罪被害等から守ることもつながります。スポーツ推進委員は、スポーツ基本法で非常勤の公務員として規定されており、公務員としての職務であることを常に忘れることなく、安全に配慮しつつ、何事も公平かつ俯瞰的に考え、誇りをもって活動していただきたいと思っています。このことはいつも皆さんに申し上げています。

——港北区スポーツ推進委員連絡協議会の障がい者スポーツへの取り組みを教えてください。
小松さん 港北区主催のイベントでは、一般の方々にボッチャなどの障がい者スポーツを知っていただけるよう啓発活動を進めています。また、身体障害者

運動会（横浜市スポーツ推進委員連絡協議会協力）には複数名の推進委員が運営協力しています。昨年、地域のケアプラザでボッチャ講習会を企画していただき、私も協力させていただきました。ですが、コロナ禍で講習会を再調整しているところです。

ありのままの自分をさらけ 出せる社会に…

——共生社会を築いていくためにスポーツ推進委員としてできることは何でしょうか？

小松さん 自分が障がい者であることをオープンにしてから、いろんな制度や人々の配慮に救われました。しかし、当然のことながら障がい者も人としての尊厳を持ち、「保護」される立場だけではなく、社会の役に立ちたい、自立したい、社会的な地位、組織の中での地位を得たいといった自己実現の欲求は健常者と変わらず持っています。それは、競争を前提とするスポ



2002年息子さんとの自転車旅行/オホーツク海を背に

「共生」ではないでしょうか。私たちスポーツ推進委員に求められるのは、地域のケアプラザや福祉施設と協力して健常者と障がい者が一緒にスポーツを楽しめる機会を作ったり、自然な交流を育む環境を作っていくことだと思います。また、区や市

のイベントやスポーツ大会等で、障がい者スポーツの啓発ブースと一緒に運営したり、同じ土俵でスポーツを競うことができるようなルールを作ること一つです。行政のスポーツ施策として展開されるようになれば、共生に向けての一步を踏み出すことができると思います。

——共生社会の「当たり前」とはどのような社会でしょう。

小松さん 車いすで移動するのに時間を要したとしても、手が不自由で書類に署名することができなくても、顔面麻痺があっても、笑顔を作ることができなくても、耳が聞こえなくて筆談で伝えるために重要な会議が頻繁に中断することがあっても…そのことに誰も違和感を覚えることがなく、必要な手助けや支援についても、「特別に対応している」といった意識や感覚がない風土です。あらゆる境遇の方がさまざまな社会で活躍されるようになれば、想定できないよ

2021年桜前線を追いかけて
/北海道でキャンプ



2021年桜前線を追いかけて/福岡の桜



うなあらゆる事態が起きるわけで、そういった状況に対して、臨機応変に手助けや支援ができるようになることで、自然な「共生」が育まれていくのだと思います。

障がい者が主張すべきは「権利」ではなく、「できない自分、できる自分」といった「ありのままの自分」「ありのままの生き様」を社会にさらけ出すことだと思えます。社会一般にその境遇を理解していただき、一般社会の一員として協調していくことが大切です。理想は「共生」そのものが意識されない社会です。僕は、会長として物事を判断したり、人前であいさつした

り、話しをすることが多いのですが、その場でパツと対応することができないから、いっぱい準備するんです。本当はあたふたする姿を見せた方がいいのかもしれませんが。利便性や効率の良さばかりを求めるのではなく、待つことやゆっくり時間をかけて進めていくこと、それぞれのペースやリズムを尊重して、慌てず焦らず、じっくりと物事を行っていくこと、ともに手を携えて、お互いの目線や歩調を合わせながら、穏やかに緩やかに過ごす毎日、共に生きる社会になつて欲しいと思いますし、そのための助けになりたいとも思っています。